

荆楚奇俠客傳

第五集

式

122  
25  
15

東 京 圖 書 館

二 五 冊	六 〇 號	三 架	二 六 函	小 說 類	和 書 門
-------------	-------------	--------	-------------	-------------	-------------

開本奇俠客傳

第五卷

式





開卷驚奇俠客傳第五集卷之二

明治十年六月

浪華 蒜園主人編次

第四十三回

假不智姻と諾く家寶舊主不復る  
巧不智辨と揮ひ女俠叔父と喜む

再說楠正直の姑摩姫の論破せらるゝ再通説の進退の首不復る  
肛裏不想入ら。慧て一事の做らるゝ遊佐不這奇いうとも免る入記録

めらど然有とて姑摩姫の爲體語の氣色ハ此もも進退の首不復る  
現豪族の役せらるゝれバ意外の恥辱の如今姑摩姫の道と如く俺家は父祖  
三世南朝の忠と盡す一父が一旦北朝へ降るも一輩下り。如是物氣さく哀へるな  
念へ有繫不裏慚くく。頻不嗟嘆たり。智も勇も兒老實人の  
小くも一味地不想回して覺期を究め佳いふ入の是非及道と一由と脱

開卷驚奇俠客傳第五集卷之二

復命し易々も然有とて免さるべし。非ぞ懲り違誤の罪に被らる。直  
 這首を自裁して室町殿へ解説せし。外を為術もな。夫の哉。このま  
 腰の小刀を抜出。衣領推其の座を組て肛を截んとあ。姑摩姫の願を駭  
 け。園の外を畏。伺候なり。安次は佐と自配して禁。願を指揮して。安  
 安次立て。忙しく。己が脇差の小刀を。干頭を技業上前寄。刀拿。正直が右の  
 脇を取。必急過。推禁。正真の所を頭を打。星籠。復一即  
 開首放。やと焦燥。姑摩姫徐。御短慮と事。奴家。同  
 と。稟も上。開伏。御生言の。身功。一且の義理。侍  
 侍。然。思欲。花商量。又。安次意。得て刀を強  
 得て刀を強。拵放。鞘曳。借。傍側。伺。正直。居真。さ  
 さ。誓。承。道。姑摩姫。室町殿。解。自。言。せ。ん。と。ま。て

謂。尚。為。術。も。侍。る。べ。し。親。事。の。一。件。の。男。女。生。涯。の。大。禮。の。れ。い。は。母。の。命。  
 不。遵。ひ。て。治。定。る。辨。は。つ。と。奴。家。の。父。も。さ。母。も。さ。ま。き。て。孰。入。の。命。を。所。て。這。一。條。を。  
 全。う。せ。ん。這。義。を。思。惟。も。う。一。那。禮。記。の。文。を。も。叔。父。と。父。と。語。へ。も。ち。い。は。れ。侍。父。と。  
 志。同。一。心。の。後。悼。の。且。其。媒。妁。の。言。を。も。う。一。那。本。文。を。も。據。回。る。道。が。正。直。回。和。  
 ら。げ。開。然。道。理。の。も。ら。と。も。辨。は。つ。と。の。權。と。の。り。變。へ。處。へ。の。權。を。以。て。行。ふ。亦。尋。  
 常。の。理。之。既。和。女。即。り。父。母。の。ま。ま。に。命。を。所。び。ま。い。ら。ん。義。絶。の。間。も。も。  
 上。皇。の。も。柳。言。の。も。在。下。と。父。と。せ。し。今。下。と。い。は。し。一。の。所。謂。權。の。處。も。も。  
 強。ち。非。禮。と。謂。へ。ら。れ。又。媒。妁。の。辨。は。つ。と。在。下。が。執。行。の。も。辨。と。關。し。り。の。も。海。後。  
 の。議。で。て。期。小。暨。が。那。人。を。以。て。月。下。翁。と。い。は。し。屈。て。這。意。不。仕。ま。い。ら。ん。正。直。一。家。  
 再。生。の。思。入。も。一。般。ら。ん。と。只。言。勸。解。と。止。ま。し。姑。摩。姫。聊。沉。吟。と。奴。家。の。  
 女。兒。の。も。も。萬。思。や。と。は。し。辨。は。つ。と。知。ま。い。は。し。計。絶。の。叔。父。の。も。

父親の當りと做らぬもの。隨意料理ひも。道も正直大が怡悦びとらふ。諸は  
 らし。その言事の歡喜は是れ及ん。この言由遊佐へ参らして。言原と。そこへ。那里  
 も。その大慶せん。開ふ。就て一議あり。和女即ち義烈男益みて。上命。おのり  
 屑とせば。是故に尙督嫡成就せらる。期に暨て。齟齬するもの。人料。何れ  
 開獎。婿の與ふ異國後世の禮を。庚帖八字と。字と。就盛に傳へ。這  
 是非常の才女。亦是非常の禮。以て後の狐疑を解んと。既ひ。納得あり  
 一へ。這些の事。さへ。この權家の豪。婿さ。縁あり。希と。一  
 筆寫し。那が。地と。安。と。近。程。東西把柄。先在下。宿野へ。然と  
 準備。す。二條。在下。が。總。一身。の。関。これ。な。住。れ。道。ま。く。  
 荆妻と商量。とて。奔走。せんと。道。が。姑摩姫。微笑。て。宿野へ。参ら。ん。の。安。ま。程。の  
 澤。あ。ら。う。と。這。莊院。も。久。く。住。馴。ひ。の。所。従。の。奴。僕。は。落。着。も。極。可。な。料。ら。ひ

難。這。誼。の。え。き。さ。あ。ら。う。と。さて。又。庚帖八字の澤。は。我。邦。の。政。実。を。所。傳。へ。事  
 あり。と。孰。が。引。出。て。今。番。の。智。儀。を。行。く。と。も。あ。ら。ん。一。切。心。得。回。々。と。推。辞。ま。さ。と。云  
 ふ。又。紛。々。謂。き。ん。欲。寫。し。難。き。もの。と。那。庚帖。の。作。法。あり。先。兩。人。の。紅。銀。子。の  
 金。字。の。製。し。て。其。上。面。に。釘。て。差。し。例。と。し。て。その。東西。まで。準備。あり。欲。と。向。き  
 て。正。直。原。来。も。這。頭。の。委。曲。を。知。び。き。あ。ら。ぬ。ゆ。で。開。く。と。る。隱。口。の。僅。ふ。額。を。拵。て  
 道。や。今日。の。遊。佐。より。直。小。来。と。い。ふ。る。東西。まで。の。齎。せ。び。翌。日。快。贈。未。ら。ん。と。さ  
 ら。ぬ。八。字。の。寫。し。と。い。ふ。姑。摩。姫。回。合。て。い。ふ。や。う。叔。父。君。萬。事。父。と。し。て。準備。し。ぬ。入  
 澤。あ。ら。う。事。毎。ふ。奴。家。が。意。と。向。ふ。へ。ま。き。み。の。非。だ。と。れ。件。の。庚帖。も。這。まで。あ。ら。せ  
 る。要。あり。金字の。工。人。の。誂。属。て。製。す。と。い。ふ。唐。土。も。恣。する。澤。と。所。見。な。れ。が。自  
 筆。の。寫。し。と。い。ふ。八。字。の。生。ま。し。本。命。の。年。月。日。時。の。支。干。ひ。四。柱。八。箇。の。文字  
 あり。丁。丑。丁。未。辛。未。巳。丑。の。八。箇。の。文字。を。製。せ。る。と。い。ふ。正。直。一。議。も。及。び。ら。ぬ

律まで好きあふ。いさく伏し制衣作ぜん。と道々矢立の筆を把出。質問しあがら件の  
八字。又其式と扇の裏面を委く記認め措て。傍邊の刀搥把て。稍身と起し  
言やう。愚老が旁の甲斐ありて頓の承允。更是か祝者の至りし。那里  
告て。近き程も良辰と擇びて儀式と行なへ。努む違憂みせむと。語と番ひ  
安次が旁と謝し。且の羞且の歡び勇む。伴當們と催促し。河備の宿所回を  
く。安次それと玄園まで着送と果て忙しく垣夜と率て。姑摩姫の前ふ赤りて直宗  
の河備さぬの疎忽さ。姫への御心と知て。多めわめめ。いふ。貴の囑ありと。  
命を換て愉快ら。御親事と苦勸め。口は柔弱の心。性質もゑ。甚以て所謂は  
開は。今更論べきと。姫への又念生し。這誓姻と許諾め。預てのみ。氣貫  
肖もや。最心軟きや。不憚あ。存ら。尚辭事。い。扶定。不許。と。赤阪へ嫁さ  
ゆふ。如何ぞ。另小仔細も。扶願を。示し。と。怒む。如く。向繫。と。垣夜。亦語

と。継て。奴家も。ん。次席。立。疎。と。河備。さ。ぬ。の。ん。話。説。と。漢。か。ら。漏。承。り。念。ふ  
成。ゆ。く。律。ふ。と。心。と。冷。し。て。侍。り。ふ。き。と。念。ひ。大。息。と。吻。を。互。に。姑。摩。姫。の。微。笑。て  
今。小。始。め。你。二。人。が。心。盡。し。然。ど。有。ら。ん。さ。れ。ど。も。痛。く。物。を。想。ひ。と。吾。俤。あり。と。人。別  
も。多。く。浸。み。承。諾。を。き。ゆ。ら。侍。り。め。れ。ど。も。叔。父。君。の。愚。直。か。怯。弱。さ。ん。本。性。と。權。門。の  
強。囑。を。固。辭。し。ひ。勿。論。誤。承。て。來。ま。さ。ら。と。念。慮。の。伏。し。寄。り。と。妾。が。論。一。律。由。と  
權。の。人。小。對。ひ。の。分。解。よ。も。無。と。ま。か。想。通。と。て。勿。れ。ら。小。自。殺。せ。ん。と。い。ふ。さ。し  
ハ。虚。嚇。鬼。ふ。め。ら。ど。実。情。さ。り。這。心。小。き。人。の。ら。へ。往。々。ふ。の。る。べ。き。誤。し。除。非。人。君  
と。絶。交。の。叔。父。の。命。と。損。な。れ。ば。と。て。正。成。卿。より。累。世。の。中。心。義。の。道。と。外。せ。と。非。義。の。義  
も。ハ。隨。順。ひ。回。り。然。ハ。あり。あ。ら。眼。前。小。妾。が。與。ふ。死。心。と。い。う。と。叔。父。と。放。棄。し。殺  
も。せ。ば。開。小。満。家。們。が。希。と。處。で。て。開。と。妾。が。悪。名。と。と。謀。る。事。ハ。必。あ。ら。ん。と。思。惟。バ  
娶。時。推。禁。せ。陽。小。那。意。ふ。任。せ。ハ。後。ふ。為。術。の。め。れ。ば。業。ふ。今。番。の。誓。姻。と。太。上

皇の院宣とひ又足利家の内命とひども開り搦鬼を満家又就盛が拙策ふ  
 疑ひかゝ義持念ふ暗弱なることも即今武家の棟梁とて信る胡亂の内命を下  
 べしものさるる満家も亦主の前まで宛家の裔と見孫が媳婦配耦せんと議とべ  
 きふ事ぞ那度帖の律まで引出さるるを以て按入生博識の僧儒交りて籌策せらる  
 べしされば這首も開き策ふ就て一箇の奇計と構へ箇様々を料らる。那重の御真  
 拿回せべきものゆゑ又叔父君も死と免せて使侍とす律もゆるべし。衆計の持永  
 們が怒り怒るゆゑのことも主訴訟んやうもあるべし。更ふ為方便あるべし。奴  
 低語や安次所て顔と相念ひ笑と含らる。這の珍奇しき御籌策現姫の神机  
 妙算鬼神も克知る事能はぬ。駭入ていへん怎生やとて御深慮のめべきゆゑに  
 あがら甚薄情き河備さるのめん苦勸の腹立平素料らる不敬と稟せ畏入ひひぬ。  
 但今般の律濟とも満家們が懲すまふ執念く崇るものゆゑ權威と奮ひて怎様の。

仇と做んも料難。這誼い奈何ひべきと。いへば姑摩姫嘆嘆して妾も亦開頭の律  
 と念ぎふふめらぬども。然有とて又如何いせん。他術と変て謀るるは俺も亦差と換て做  
 べきゆゑに防衛べし。きうとも縁故の兵軍兵を揃へ推寄来とて結果とやどの律入の  
 ぶらぞに他さるものゆゑに開其响應とて怎をも方便のべし。倘天命の盡るるが  
 甚麼多る補助ありとても遁るるも道あり。命一箇と忠孝も殺して仁義と全くせん而已  
 今より按ずるゆゑと詞涼しく説諭せば安次險不慚愧し宣ふ處定ふ然る。唯  
 左右も天命も任せて義理と失ひぬ。肝要とてひらきうとて身づる禍害と醸と  
 へきふもひらき。俺々努力の暨んむご心と配りひんといひつ退き出ふる。不題再説正  
 直の安外外姑摩姫が親事の律と會得々々大ふ飲ひ興頭。當日ハ既小晩景を  
 見先俺宿野河備も回ると木石を古子と喚出。今日就盛ふ吩咐一律よう。八九の院  
 不到り一律まじ借箇々々詳く報て。是ハ這持永が裏不律の就きうとて本意かく

あつちのこころをわけて  
さうりらた  
敦義使到八九荘院  
おのれとうま  
うまの伝





念ひて父親の密訪。上命を借て素懐を遂へと企つる疑念より、唯  
 勿々や内謀とのうらふ只得言果とて那裡へ去るものう。那姑  
 母も納得とてまじと想ひ、酷く辛勞する。左から右から洋就  
 字も強て語りめらるる。既ふ心易きゆ、然の如きも、這後  
 不備て準備せよとの命あり、其甚摩洋とて説出せらる。曾  
 来俺一家の大事及びべきされ、集畧の他がら、夜やと違  
 不測の禍は出来つべ。されば衣服調度の打点も、着  
 も多うべし。這首の洋ハ、你们母子ハ打任とて、甚摩  
 して誰ハ属あ足らぬ東西ハ風爐ハ、即ハ吩咐て買  
 尚省示譚及び、尙風浪ある、洋整や、管領父子の推  
 宜し、解道為多と、己が躬の後の榮華、拿交私語告  
 想

吐息を吹き、又却幼勞の洋ハ、衣裳のみの意得は、  
 人、覺束る、こと、開左も右も、平生ハ、任情任性  
 猛可屈て會得を、上の御説の故、危殆き、の、  
 信、諫、正直頻ハ、打領、開心得、  
 他、生来の、支千の、八字、照据、把、  
 二人の、扇、把、  
 危殆く想ひ、借而、正直ハ、開詰、朝遊、佐の、城、  
 て、姑摩、姫、苦勸、  
 一切、隨順、  
 復、  
 心解、先、  
 那、庚、  
 試、

伏魔仙傳卷二 三十三

稟と故本命をとりて所得て回すぬ。但在下が宅へ曳移んとす。其の一條はうら。期は  
 暨ふまを御免を被るべく稟す。あれども強てと稟る。他亦必異語を説ん。欽這の  
 畢音竟小夏をまじ先貴老お伺ひ。後小為方便もあらんとて。開任りて回す。うらとて。  
 尚詳悉お報し。就盛所て大歡喜。上の御謀かあれが。ち稟ららん。勿論。うら。  
 令姪女の心操を再三辞退せんと。案外。口只一遍。で庚帖の淨まで果され  
 貴所の法。勅旁查入。うら。這上。口。以て管領父子。お回報稟。き満足。らん。但。那  
 庚帖の令姪女の自筆。お寫き。うら。と。向。正直。ま。自筆。お寫。ひ。い。他。云々  
 の作法。あれ。在。下方。で。調。べ。と。支。干。を。示。う。ら。就。盛。眉。を。顰。め。并。の  
 聊不審。な。と。開。開。で。着。る。べ。猶。又。序。次。の。事。も。あ。ら。那。名。を。う。ら。令。姪。女。の。自  
 筆。と。添。て。写。さ。ん。ゆ。は。哄。誘。と。着。ら。べ。と。正。直。話。ひ。て。現。然。と。あ。ん。と。想。ひ。う。正  
 直。又。道。う。姪。女。難。論。う。中。小。在。下。と。父。親。と。候。と。入。另。お。媒。約。を。う。と。稟。一。故

ふその期。お至ら。貴老。お商量。と。託。せ。と。う。き。這。の。孰。入。も。耳。き。が。如。く。も。原。来  
 他。十。分。お。任。情。を。稟。入。御。煩。旁。ら。う。期。お。至。ら。席。お。臨。指。揮。と。賜。る。べ。と。伺。ふ。  
 就。盛。の。領。ま。き。愚。老。當。國。の。守。護。代。の。私。の。縁。譚。お。聞。く。も。の。ね。と。他。の。官  
 領。家。の。婚。姻。も。且。御。内。談。の。趣。も。あ。ら。不。肖。ら。媒。約。の。淨。ら。う。の。勉。ひ。下。任。教。彼  
 此。の。所。要。と。も。條。持。媒。身。お。吟。附。て。料。理。す。ら。ぞ。有。へ。な。れ。萬。夏。の。他。と。議。す。ら。と。い。ふ  
 小。正。直。音。心。得。て。當。日。の。宿。所。へ。回。ら。う。就。盛。の。ち。も。措。と。條。持。媒。身。を。喚。出。と。正。直  
 が。説。一。由。を。委。示。と。持。永。が。赤。阪。の。館。差。一。又。言。由。譽。九。郎。と。京。へ。登。せ。と。満。家。も。諱  
 恁。々。と。報。う。ら。持。永。い。ら。れ。を。听。て。天。へ。も。上。る。心。地。と。怡。悅。外。お。出。一。先。既。恭  
 勝。們。お。情。由。を。告。て。媒。身。が。旁。を。太。く。賞。一。酒。饌。を。出。さ。せ。と。前。祝。の。酒。を。只。官。打。吞。つ  
 那。姑。摩。姫。が。評。品。の。を。開。日。の。莫。て。翌。日。の。持。永。親。ら。就。成。無。城。の。も。て。旁。を。謝。一。又  
 赤。阪。お。迎。へ。来。り。て。大。お。酒。宴。の。延。席。を。用。き。就。盛。と。款。待。つ。就。彼。此。の。進。退。お。商。量

まどろ一日も千秋の念慮も満家の回春を听良辰を撰びて开程の儀を行くと歡心  
 勇まぬ満家も亦鸞九郎の縁譚整ひたる由を听て原来預ての計議の如く姑摩  
 姫既小呂小雀と心易くと歡喜つて就盛持永の消息くと萬端开地ふて脱落  
 る料理ふべと許しつて就盛持永と商議して本月二十日と最上の吉日と撰  
 び定ち采納の物件を正真が河備の館へ贈去んと專开準備とあり泰勝媒鳥  
 ら小分付て先その打白と做しつて持永只麼氣と張て滓治定とある五荷七  
 種小尚更緯と増補へ黄金白銀堆積積上とも犹飽足後親ら目録の指  
 揮と東西二箇づ檢監しつ中も楠家の重寶する錦の御旗已下の東西の  
 舊二重箱の上小又島桐の外重の箱と最も花麗小造せて恭しく臺小載せ  
 媒鳥小鸞九郎と相副て奴隷小對の皂被を着せ各跟隨苛めしつて差まん  
 とぞ構へる正直の庚帖と分付し依小製せんとて工人を口口て件の金字と急忙し

詭へ囁一日も疾くと促くと辛うじて整ひつて自身小携へて八九去き姑摩姫小對面  
 して名所ぐるの自筆小寫と就盛が手紙と諄回と歡解とあり姑摩姫要時  
 沉吟してまづ言ふゆゑに這來り寫はんとてつゝ墨墨小寫するも正直  
 大小歡喜て就盛ふんと示せ就て金字小製しつて另小塔引出の料をて金庄家の太刀  
 一口小札好き鎧一領と目錄の外小相具と當日の米と等小たる滓の紛雜いへく  
 もめんど新郎岳翁の両家のまら就盛も只這件のゆふ朝暮奔走しつたり  
 現室町家の権臣の畠山家の媳迎るるに信も有べき談是れ入持永が好色の  
 意小詣り就盛們が事と好くと拿采と阿諛面従の小人小情態這里小想像べし  
 間話休題借而此日の早天小赤阪より使者と出て河備の館小采納の物件と  
 贈來る湯浅敦義と京探正直小披露すも正直使者小對面して式の如  
 く饗食と設け引出物と與ふも使者の賀と演恩と謝し赤阪の館へ回つて程も

めづむの正直の教義を分けて件の物件と又更ふ八九の莊院へ差す教義禮  
 服を粧ひて伴當夥多の進物甚多吊せて八九の行到り安次を喚出て今日も吉展  
 るもて赤坂殿より米納と贈越とあるも就ち命を直に與せ奉り  
 這由稟上るべしと恭しく懐中より目錄と投出し遊樂と安次を披露  
 しく。姑摩姫の肴完て安次を説やう仰の趣承りね。これども今番の誓婚の  
 叔父君より父親として料理の辨るべし。這等の東西も奴家の方の留措きやう  
 にか。叔父君こそ彼れとらん費用も多うべし。さういふおれに於て午の一箇も  
 償ひ多入但一當家の重寶なる錦の御旗菊水の旗祖先手澤の文書類の原是奴家  
 が東西の這件をこの稟受てこの回帖の添らるべし。這等の由で叔父君が宜  
 く提擲稟さるべしと言寡くは聲も隠々漏て听えらる。安次出て教義右の次  
 をも演説と當下教義道々開の宣するも。這物件の塔君より信は

東西の這件を枉て受取らるべし。主人諱の稟も是非とも受納のめづむ  
 押上稟上るべし。這儘回らる在下。脱落して答めらる。さういふ安次  
 再通内か入て教義の旨と報る。姑摩姫重宝と道々風爐八郎の所も一理  
 のつて覺ゆ。この日奴家自ら叔父君の稟するゆゑ。萬端父親の  
 隨意の鎖細の細と奴家も報るふ及び。と稟措添らる。信と  
 使者の脱走の情由の更なる。大詔ふと鷹揚の。依ふ  
 安次が又外に出て演説。這ういふと教義の。回りて開申稟え。ん重宝を  
 是として件の箱と安次を遞与。ふ。受拿て姑摩姫を披露。姑摩姫  
 得と査着て。故の如く小蓋と。那外重宝の鳥桐の箱と。と甚ふ載て既ふ重  
 器を受拿ね。此箱の一回稟せ。復一依回帖と一筆寫し遞と。さういふ安次意得  
 て次へ出。認め。立出て風爐八郎の件の旨と言傳へ箱と回帖と遞與。と教義

へ肩と鬮車り這相い這儘ふ這方ふ差措るべし。これ又携へ回るる甚摩とあらん  
 不祥ききて必主公公叱らるべしと推返をも安次も又推返して。さる趣むていん  
 とも知る如く偏窟ある。主人の承買ひに九番稟ひとも。決して受納致せまじ。  
 一旦回して河備さまが稟上りて待るべし。と入が敷義為方めく。疑念も這里か  
 起しども暇と報て那箱と再伴當入扛荷るも。河備小回りて正直不首様々ふひ。と  
 入が正直家小相違へ想難て承も措とび就て遊佐許去向ひく。件の情由と詰  
 説を念ふさまと商量とまじ。就盛もや訝して開亦奇怪の緯ども。然らば  
 這些の小事と云々と論辨せ復もや洋の障とあらん。詮する所は奥入と云ふは  
 そのうちも幸来月朔の婚禮が最上の吉日と。いふもあつた。左馬殿が商議にて  
 性急なども準備をせし。管領家へ在下より達せが故障あるべし。互の混雜  
 査しやと。洋運滞しく違愛のる。悔とも開甲斐あるべし。貴方ふ準備整るべし

とも對譚のへ鹿漏とらふべし。這吉と以て御令室やも。媳婦君も報られて。  
 快々打点せらるべし。と入が正直異議あ及ぶ。開火急の義あると。さる可も  
 道理ある。随分料理まらるべし。鹿漏の緯の後を補ふていん宜く稟入るべし  
 と言稟して私身小回り。木石若子小這由と告。眉火着く嫁娶打点も夜も  
 ち。寢と寐ねまて心も盡して言つ。次日の姑摩姫も。洋由と自ら報て諄回し  
 期と均し。口も堅めて回るる。持永の就盛より。火速や。とつ趣と報あせく。大み  
 歡喜び。獨漫か雀踊して。鎖細の事とが糾も問。月の特枝と折。龍の領の珠  
 と得る。心地す。只旦々ふ恭勝們と急して。嫁迎の。後割と。奥の受令事  
 遞與まで。室町様の故実と調べ。紋切形の試業と。或は又親迎の打紛れ。装束  
 調度。跟随の形。谷下の人との品定まで。此彼と。論ひ。鳥帽子の當家の左折  
 狩衣の色。何よ。馬の鴨毛が眼を立て。女の惣来美麗と。着ひ。あ。黒毛の厚縁

紅色の相應しうべし。鎗の例の片鎌う。否それぞの片の字が禁句あるが文字の對道具が撮合愛さくひん。さう伴當の几各ぞ。豫て算へて津足ぞ。遊佐の議して準備をよ。跟隨の重役の差桐木エ介が役あるぞと。所て恭勝沈吟。遠巡しつ。回答する。仰ど背くやひる。嚮も稟上。如く小可の雙持め。面も露し馬の騎で。晴がききん伴當の。顔が。うを。險之迷惑ひ。いんせも果ぞ持水と眼と。睜で聲高やう。その本今甚麼。さう前番も既ありひ。さう如く。這河内の米地。咱們が伴當。疎忽。ゆんや。況や。今番の多勢と率連。家格と。正してゆく。行列。誰敢て僻事せん。其誼の心安うべし。尙开仇敵。撞見さ。追取。綱て一人も漏れ。結果さ。後日の憂を。攘ひて枕の高き。あや。心強く跟隨ぞ。和郎が在。那這と。津の不便の多う。入。小那偷看。美婦人。と。俺。成ての上。和主が妻。小得。と。和主も親迎の伴當。外。所謂。と。若。られて血氣の壯夫。有。緊

お不口もひ難て。さう。仰。隨。ひ。ん。伴當。お。立。び。さ。う。と。不測の憂。め。必。者。棄。め。と。對。へ。承。諾。と。尚。云。云。と。其。程。の。准。備。を。齊。一。急。ぎ。う。悠。閑。正。月。も。疾。く。過。去。て。二。月。朔。日。お。多。う。正。直。の。姑。摩。姫。と。先。俺。方。小。迎。へ。ん。と。て。晚。う。湯。淺。敦。義。小。幾。名。の。伴。當。と。隸。て。新。小。製。と。轎。子。の。金。具。桐。く。光。く。如。き。と。轎。夫。六。名。お。拾。さ。う。專。女。の。乗。ぎ。跟。隨。轎。子。難。刀。甚。金。傘。ふ。ま。ま。花。鹿。粧。ひ。と。ハ。九。の。莊。院。お。差。し。う。小。要。時。の。て。敦。義。小。奴。隸。一。名。お。後。へ。着。忙。し。く。走。回。り。正。直。お。稟。さ。う。仰。お。任。せ。莊。院。へ。参。り。今。宵。移。ら。せ。め。お。き。由。と。申。入。ひ。ひ。小。萬。屋。復。一。即。立。出。て。豫。て。今。宵。参。ら。ん。と。約。諾。し。て。ひ。ん。姑。摩。姫。の。方。地。より。猛。可。小。腹。痛。し。ひ。も。醫。師。小。診。察。と。し。る。處。只。是。時。氣。お。傷。ら。と。て。飲。食。留。滞。せ。し。る。小。要。時。總。ひ。ひ。就。て。快。く。あ。ん。と。稟。上。候。の。も。ど。も。既。お。や。今。宵。の。津。お。い。づ。志。ま。し。も。参。が。さ。う。平。素。も。信。持。病。の。と。快。復。次第。這。方。赤。い。ぞ。

ひりんと稟と依て案お相違し。あや左や右や稟とねども。今宵出立るる氣色はと  
 えび因てあん指揮と伺かん。與伴當どが那裡小残り。罷回てひとりの正直一驚と吃  
 し。その又曾安うらな洋へ他尚病病お假託て。誓姻の期と延し多。遊佐より必  
 咄們と疑ひ等閑へあど譴責べきもの。信まとも病氣とらんと強て今宵迎入とせよ。  
 又甚麼洋とらふらるべき。這里お物と想んより。俺自ら訪ひて。強て他お對面し  
 容體と窺ひらう入机お應じ料理のべし。休も泰とて急忙しく馬お打騎伴當  
 とも隨ど。敦義だうと跟へく。暮々地まきまき安次と喚出て。姑摩姫の病氣  
 と伺ひ和まお既お知らう如く。今宵の誓姻の事お後。確乎お病症とも肯届  
 きて。昨日と延し多の故が。是由ひく是非ともお對面せんと稟べ。勿論病床の休  
 りと決て遠慮あるらう。この安次畏て就て姑摩姫お報らう入る要時  
 て立出つ。病中の誼おひか。一室お請じ春らせん。却は無禮おひか。圖お阻り拜

謂とべ。這義とらへるらう。這方へとひらるる。正直をいへる細事と伺ひ。  
 さうが案内とらへて。後お跟て去て見と。便寮の紙門も左右お開せ燈火も  
 明々ぬらぬ小簾と一重繫て在り。开外面の小所も。毛氈と二重舖せて。正直が座  
 を備け。太やうの蠟燭と燭臺二脚お照し。内面の動静も見る所者  
 縁と女童二個をり。右と左お衝居らる。开中央の茶会表お姑摩姫の非と  
 と白綾をるる。襦とらう。衣の伏して在る。有繫お髪も蓬とらう。  
 びとて苦悶と容もめく。端然とて在る。正直十分お着急て。日疑と  
 限おられ座すると就て聲と掛て。姪女今宵の病うと。急なるの律おある。既お  
 約せ日ゆめ。大驟の所おあら。押し轎子お乗て入。俺家まで。遠くもあら。  
 小醫療の律お宿所と。尚又心と用らる。道と。姑摩姫と。咳  
 き念お保り。叔父君の親ら訪せんと。最も畏く。病中も。無禮

先もかゝり晩より持病の腹痛起りて轎子もいづれも乗べくもあらず。今宵は得も  
 泰らぬに設計奴家が泰らばこそ。御誓禮の妨あらずも信じて就て快く成付らば。  
 快く泰りて言祝稟え遅引のう方許させぬと外に道もまづ正直大お  
 驚駭ききく開甚麼といふらん病體なれば為術もいと疾く俺們も報せし酷く心  
 と推せぬ除非と右まれ右まれ約せ入興の今宵あふ和女郎が在る誰ぞ送らん  
 任外に〜いふまじゆとらども姑摩姫空惚と開宣するゆあ〜。奴家の最初  
 より持永の妻あらんといふゆり〜。萬丈你が又親と〜。料らぬの誓廻直  
 ひ若子御寮こそ今宵のうらふ入興のう津とあふ侍らぬと知れぬ  
 小六工傭きて道と叩て正直の面の色赤く成や又青く成。また駭き怒りて物も言  
 せぬ。呆るゆの半响ぞ。眼ま詰て在るが想ひの聲と振立て原來和女郎在下と  
 念慮の儘欺許も恠ととも往日小將軍家の命も傳へて津明々地も堅約〜。

小介後も又采納ふと錦の御旗以下の東西も贈りて受ふ非ぞや。殊ふ和  
 女郎が生来の八字と明し示〜。在下金字も調へ。尚亦自筆ふ和女郎の諱  
 と庚帖も寫せて贈りて。這半の證據のものと今更自う欺んぬと教圍猛  
 く罵さば姑摩姫吻吻と打笑ひて御説まこのまへも管領への御内書と花  
 押さるる宛東西と以て恠とて寔と思ふまじ。又俺家の重寶の嚮小夜稠の草紙  
 們が盗奪てお身の宿所へ携去ると返さざらぬ東西ありのまじ。這是舊主の  
 受へし理義あり。恠とてこれと音物とせん。這義の既も稟と。其餘采納の目錄の  
 你も受納〜。然らば餘の女兒御寮若子ねと嫁〜。

本命の八字は津の我日本多所も傳へ非例の禮あり。公然と〜。讓  
 びま非ぞ況や奴家が本命八字と持永も贈り〜。日外奴家が寫らるるハサロ  
 子御寮の代筆あり。怒と〜。様も〜。物も。和女郎が自





筆把てこまこ開諱と寫して、女兒が代筆せり、抑言の強説を然と  
 とも、那ハ字の今も忘れぬ應永四年丁未の年とて丁未の月辛未の日巳亥の時と  
 和女郎が生まるの総月の巳假令非例の禮ゆゑ、今更道に入路はしと、なご姑  
 摩姫又打笑ひて、恁ら若子ぬゝの産を、入る月日を幾時と想ひぬ、又奴家が産  
 せり、この月日も知らり、さば試験はとも、道に直眼と睨て、若子が産せり、  
 同総の五月廿八日の曉天の八鼓より、開と恁生と忘るべき、又和女郎が産せり、  
 正元と絶交して、俺は京洛に在るを、開と恁くも知れど、後小阿兄お仕へる侍某甲が、  
 俺も慕ひて、帰降するに、所するに、造り十月七日と云ふ、且その総の十月、朔日、就  
 ち、ま、措、も、つ、う、今も覚えらる、と云ふ、小姑摩姫安次と喚び、平と云ふ、  
 手昔、應永四年の舊暦の有るを、快持出て、叔父君が、令着せらる、と云ふ、  
 安次の氣毒、自が言禀して、曆本を把出、扇子に載て、恭しく、正直が身邊に、措け、

姑摩姫再び道々の、諺を論じて、證據、さば開曆本と着せり、疑念を解いて  
 め、さ、こ、這年五月廿八日、小番六日の節と、即ち丁未の月、己酉の日は、  
 未の日、や、其、曉天の八鼓の巳亥の時、當り、又十月、壬子の月、己酉の日は、  
 こ、小、當り、開、朔、日、は、巳、亥、の、日、の、所のま措に奴家の七日の巳亥の日、  
 所、傳、  
 知る、且、又、奴家、が、寫、さ、つ、唯、庚、帖、が、実、名、と、の、  
 と、の、め、さ、の、  
 し、も、強、め、  
 り、と、い、是、止、字、の、  
 書、い、と、め、と、馬、へ、  
 若、子、が、ハ、字、を、

着てのどど現も錯ら伊勢曆僻まら論と直と呆と物と得言と姑  
摩姫とことと声掛とこれ音あひて奴家が詞の偽詐を知らん恚と  
庚帖の八字と責めるとも持永が妻とあぶき所謂の愛と愛と  
従ふべし所見ざりたり。

第四十四回

狼唄の岳公羽漫小思愛と書る  
痴情は新郎暗小燕石は抱く

當下正直膝立直一太やあ息と吻と接て原来和女郎在下と父が義絶の弟  
ぞと執念く怨とて深くも量と自滅をて肚と疼んと想ひて有べし  
さる然に雙言の人と識で騙らるるハ愚昧とて倍まで番ひ一言語の結局と古長  
やうか説騎とる免氣と思へ即今這裡は和女郎と執と正直が肚載とる念  
ども姉を敵手と結果とる前把の躬の名と腐と唯運命の極の呀是非か懸置らぬ

次第あり宿所飯まで自裁して室町殿罪科と謝せんきありこの這回の替姻  
和女一名と恚へいふとも管領も知と遊佐も知と世人も亦知と和女郎のやと  
分解ととも竟て身小禍災あり暇稟とと氣色とて四下と脱視し遺恨の眼  
泣水と浮れて衝起し刀と把て去んとすと姑摩姫要時と推扯し先等も  
小腹と入拜め侍らぬ奴家ありと些少の主意あてて叔父君小禍言と讓し  
と義絶の縁由とて執念く出宗と徐々小座して奴家と言と尚も尋念  
一名の叔父君と恚で執念く出宗と徐々小座して奴家と言と尚も尋念  
一の短慮の功と成難しとハ正直やうやくの舊の席小就し姑摩姫の類と端  
一稟とる畏憚のりあふ你ハ天性老実小在と故満家就盛持永們が相議と  
嚇ら味ら駈役と奴家と恚と上と媒妙ととあやと抑今般の親事と満家  
就盛們の謀畧と但一人持永小繫想一豪華せんとの企止る詳悉の知と

前回你の媒妁として説来せしる律のうへ後奴家が母の上境は路頭は奸賊は伏  
 措と轎子と奪んせしと快く猜しと虎口と遁せしるは尚再懲らまふ院宣説  
 意と詐して你を欺騙し威を以て逼り強て奴家と赤坂の居館へ入ると計を  
 うるは必定好意ありのよし。恠るは虚々との術に乗て那里へ去て恥辱の過が奴  
 家一箇が縁由とて父祖とも汚し就て又叔父君の醜名とも世に露さん本意か  
 さふ云々と推辞しと你の省も思量らば自害せんとも宣ひ一勢ひ扯じとも非と  
 ば為方もあく陽に先許諾しる面色しと你的命を救ひしは是併又も連る枝を  
 折れと想分る然るめれは一言も。奴家嫁と持永の妻ありんと鮮明にお言切る  
 めいめーこの當下の回合と思惟しる明々めん俗に登時接するは你の一向足  
 利家の恩や畏れ徳を慕ひて忠やたさん事との思ふもいふ其入る管領  
 父子の權威と羨む仰むのつと識るれば若子御寮と持永の妻をせむは你の就

管領と極ごちん與多る有るが故と思ひかゝる。奴家代め若子御寮と嫁し  
 めいん様のご料理と想ひかゝる明々地ふらも出が危殆と。さや若者のまゝ  
 とて故意這期が通るご等してまゝに露頭し信しるは夏之御宣ひし所謂權  
 め處するめて更にお多き意も非ぞ。人權を以て為る時我も亦權を以て處せざ  
 るは得ざるんや。強ち非禮とらふがうらまえて又生来八字の事我れは神せり。  
 恠でもらざる管領ありと誰入る業ひ出て奴家が為違ふ。與若く未ん  
 巧めりあらん。とせも又道るまふ。何と你も泰らせらるる亦是是承と。  
 非常の禮を對へる。非常の善策もどける。こゝに若子ぬの八字を以てし去給  
 若子ぬの病痾は响如意宝珠院の地藏并祈禱せさせあひし。承塵の  
 掛たる漆牌も寫しうらま看て識るの。さや其慶の故に若子ぬの  
 本命と奴家が知縁はらんや。俗箇の律を听併めて。満家們的計として行術の

あつちのつとつとときけ。旁痛き辞めり非ざるの莫幻術といふ。神衰自在の形相と示せて愚俗を化度する方便  
 教ふその悪俗を取せんとして。神衰自在の形相と示せて愚俗を化度する方便  
 ろるを神通とて唱へり唯亦尊く号し而已。智者の用する事非ざるを  
 念と婦女の身とて。幻化を克せんや。案ふ他は幻術の者の自ら幻の幻たるを  
 悟りて人をして幻術めり。いふふことめり。任他開いたまはる。已ま  
 字の庚帖も。苦子御寮の支子とて。赤坂へ贈遣る。今宵も。苦子御寮  
 送ると那里へ嫁し。人の命入采納と贈る。女の要人の原身。當然の理るれを  
 異論とせんや。いふ。うらも危殆く思ひぬ。猶姑摩姫と喚做。筒様  
 筒様料り。いふ。必成就とせんや。うら。如今自滅せん。うら。災厄は一轉  
 して却て出身の基本とせんや。續令其律後。うら。還見。うら。他亦院  
 宜誠意と詐購ら。大罪の。うら。聲と吞て。決て。うら。能。猶。就盛

們が事い。論め。登時妾你代。差能分解。はりて。此も你  
 のうら懸。奈何料理。うら。道とて正直再遍。尿まで。肚裏に。道。這姑  
 摩姫。青年十七。乳臭の失。うら。少女。うら。神机妙笑。横無盡。うら。侶。ま。送  
 一。恐怖。祖。父。正成。卿。も。と。及。び。うら。現。克。思。惟。院。宣。御。談。と。唱。へ  
 一。管。領。父。子。就。盛。が。虚。偽。さ。う。ら。ま。と。も。俺。他。們。が。下。風。立。ま。假。令。虚  
 偽。さ。り。と。も。癸。う。出。崇。と。受。ん。而。已。う。う。と。今。更。姑。摩。姫。が。謀。界。の。如。く。後。不  
 露。頭。う。う。ん。を。う。愛。女。が。う。失。ま。ん。缺。ま。と。も。思。量。も。あ。る。を。枕。問。詰  
 て。危。氣。あ。く。ば。も。謀。ん。と。辛。う。と。困。ぜ。う。面。と。拾。て。う。う。音。表。出。う。和  
 女。即。が。騙。計。う。律。と。も。初。後。う。知。倒。明。う。縁。故。と。遊。佐。報。て。假。父。と  
 あ。る。の。を。辞。せん。今。と。做。て。開。も。及。び。う。う。と。和。女。即。が。籌。策。不。後。う。發  
 覺。せん。目。小。甚。麼。様。の。禍。め。う。ん。も。料。難。一。且。又。和。女。即。が。美。貌。あ。る。と。女。兒。苦。子。の

醜みにくきうへふ。去きざ給たまの痘瘡うぶのいと重おもくて。父母ちちうちも厭いとはる。重おも貴うの家いへ。生な長ながく。持もち永えいいと肯うけんや。忽たちまち小こ憤怒ふんごと起おこして。性命せうめいも失うしなはるべし。それそれも有あ繫がふ不便ふびんあり。左ひだりも右みぎも運命うんめいありて。和女わにょ郎らうが與あふ一家いっか奉ほうりて。滅めつ亡ぶつせらる。今宵こよひふめのと怨うらむ。姑こ摩ま姫ひめ推おし禁きんりて。开頭かいとうの用意よういもめて。侍さむらい人ひと持もち永えいの一遍いっぺんも奴家やつがと着きる。洋やう多たき。好こう醜しうと論ろんへも。除ぞく非ひ偷とう着ちやくる。ゆめありとも。私わたくしのゆめと公然こうぜんとして。いふべも。但たゞ満家まんかの花はな浴よくひて。面おもても照あらる。ゆめありとも。去きざ給たまの痘瘡うぶ係かへりて。醜みにくく成なれ。宣のたまへ。一度いちど合あはせ。いふ。容よう顔がんの故ゆゑに。去きざん。有あ繫がふ愧かたじけない。然しかども一向いっしやう小こ後ご難なん如何いかと憚おそる。明あきく小こ奴家やつがが較かく計けいと報ほうめりとも。異いう。いふ。信しんて持もち永えい一旦いちだん怒いかるといふ。とも。懲ちやうず。ま。奴家やつがと欺あざむくと想おもへ。必かならず定ぢやうせ。若わか子こや。離りれ。男おとこと。いふ。さ。い。人ひと間まみ。漸しだ々々小こ夫婦ふうふの中間ちゆうかんも和わべ。忙いそぐ。回かへりて。若わか子こや。報ほうて。如ごとく。料りやうを。入いれ。妻つまが計けいと

猜うらやみ。今いまより寔まことと吐つき。這この期き小こ迫せまりて。就あ盛さか們ら你なんぢの罪つみとせ。いふ。人ひとや。解と道みち尋たづ思かふ。いふ。と。掌て小こ拿とり。如ごとく。論ろんず。正ただ直ただ稍しやう沉ちん吟ぎん。律りつと偽いつはりりて。危あやし。行いふ。原もと来きた好このめ。いふ。今宵こよひと成なれ。殊ことごと更さらふ。做なすべき。為なす。便たやすく。男おとこあり。家いへ小こ回かへりて。木石もくせき們ら小こ商しょう量りやうりて。後あとふ。和女わにょ郎らうが異い見けんふ。憑よる。いふ。叔しやくと。騙あや死しせ。和女わにょ郎らうが心こころど恨うらみ。き。咳せきひ。起たり。河か備べいと投なり。回かへり。風ふう爐ろ八はち郎らうの轎こし子こと徒ただ。拾ひろひ。出でる。ま。相あい。倒たふす。腹はら立たり。會あひ。せ。跟お方かた小こ添そひ。回かへり。姑こ摩ま姫ひめの跡あと目め送おくりて。安やす次つぎと身み邊へ小こ招まき。真まことふ。叔しやく父ふ君きみ小こ怨うら恨みと受うけ。快たのし。身み小こ繫かり。火ひと拂はらひ。難がた。若わか子こ回かへり。近ちかき。小こ就しゆ盛さか們らが。奴家やつがと悪わるく。為なす。登のぼり。時とき小こ尋たづ念ねんも。先まづ亦また段だんの動うご静しずと着きて。後あと小こ料りやうら。様やうあり。你なんぢの心こころ利とく。奴家やつがと甚たま。那そこ里こゝ入いる。隠かくる。小こ内うち外そとの動うご静しずと窺うかがひ。肝かん要やうと。安やす次つぎ承うけりて。开頭かいとうの用意よういを。做なす。

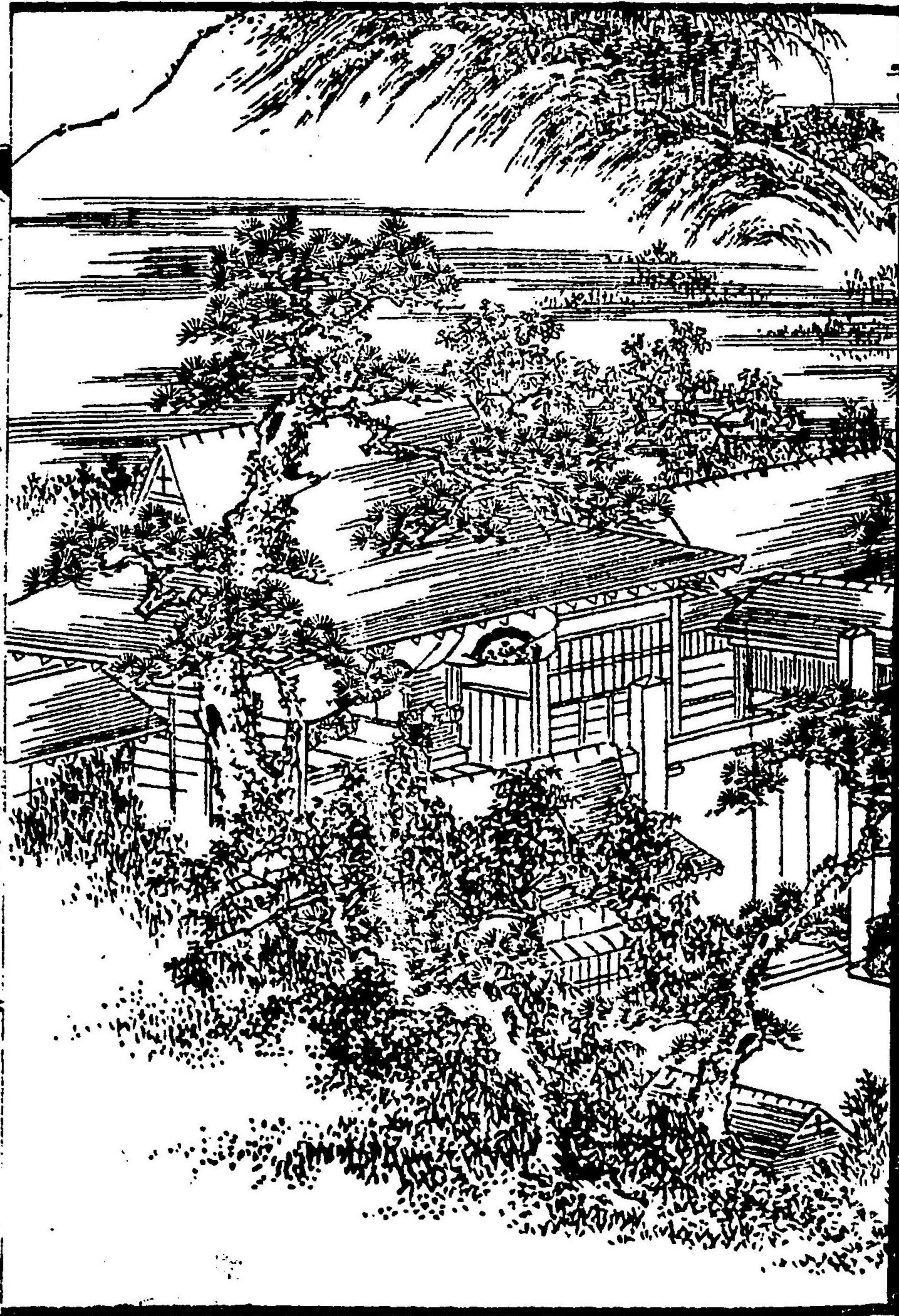
却説正直の回つと就て木石若子と喚出て先ん頻ふ歎息す。木石若子の意麼  
 あり。辨とも思ひ難つ。左右より。那首の首尾の意あり。姑摩姫との意あり。  
 病病の寔でいと送代か向かれば正直の怨あり。泣水と二眼浮べて道や。酢と  
 も味噌でも食難き姑摩姫が机裏の謀畧。箇様々と情なき告て焦る。辨と  
 知るべ。初発より作麼様の院宣誑意う。つても死力を盡して辞せ。う。か  
 鈍も他も騙ら。つ。寛氣の今更悔て復ら。然として少女と敵手。刺  
 違へても死ぐ。只這上の正直が命運極まる處。尋常の肚切て違約の罪  
 と謝せん。外も尋念の父のいと。听て駭く木石若子。要時。呆とて物と言  
 と泣水さへも益可小出絲の惘然と。と在る。木石の稍湧出。泣水と抑へて  
 いひ。今と論人の愚痴。估と。那持永が其最初。你と媒妁。か。囑  
 どり。辞めると。屢い。と。你の听て提持。果と。姑摩姫。從。と。持永

執念く父の報て果して如共。有難美小及べり。渡莫今番の上様の御説とあり  
 と奈何のせん。と。枕姑摩姫の任情小詐偽。とて終小。你の大事。と。今兄  
 君と義絶の故。と。さ。執念く恨る。秋。と。甚の女子。と。這入の初発  
 の。始末と遊佐へ報る。那今と計議の。今徒か。人。肝。と。謝。と。も  
 這。休。小。世の胡慮と。あ。人。而。巳。の。先。遊。佐。へ。報。る。と。怨。と。悲。と。諫。と。と。正直頭と  
 打。掉。と。辨。滴。末。の。通。と。これ。が。赤。阪。の。准。備。と。等。人。処。へ。云。と。い。ひ。て。勸。解。と。も。持。永  
 就。盛。必。明。と。脱。落。と。して。京。へ。稟。と。罰。す。る。と。べ。然。ら。ば。咱。們。が。今。迄。の。忠。勤。も  
 水。沫。と。あり。又。且。人。の。胡。慮。と。あ。人。只。潔。く。自。害。と。赤。き。心。と。現。え。入。明。亡。後。の  
 你。們。母。女。風。爐。八。郎。と。商。議。と。て。這。寺。の。由。と。訴。へ。て。寛。恨。を。言。め。の。と。と。い。ふ。と  
 木。石。推。禁。と。て。その。ま。ま。益。る。と。辨。小。估。と。さ。ま。と。思。食。と。う。が。姑。摩。姫。が。口。に。如。く。  
 若。子。と。悄。々。小。赤。阪。へ。送。り。て。今。宵。の。急。難。と。先。遁。と。て。看。の。の。と。那。姑。摩。姫。の

腹黒の。開の腹立く侍ども。人騙して那邊這邊と。淫と脱る手段。うら  
 然として孰も及ぶ的も。任まれば他が。ふまき小行ひ。試みる。萬ふ一個も。急難と脱  
 る。ゆの有もや。入開上りて。災難のおん身上。係る。さう。當下。おん。肛。口。とも。  
 遅く。の。信。ね。辨。め。ら。せ。ぬ。さ。う。ば。奴。家。も。おん。伴。當。と。眞。土。下。り。騙。ら。せ。る。克。共。  
 小報の。一。渡。莫。這。見。ら。客。員。の。十。名。並。も。は。ら。う。る。小。去。春。の。痘。瘡。は。最。重。う。て。痲  
 之。痛。く。痕。ま。ま。那。驕。誇。る。持。永。ぬ。の。終。身。全。く。看。る。べ。く。も。い。は。れ。選。集。守。は  
 る。果。て。物。の。想。い。せ。んと。念。へ。最。々。差。方。め。く。不。便。小。信。と。聲。立。て。よ。う。と。ど。ろ。ろ  
 り。小。俯。沉。し。が。念。復。し。と。若。子。を。顧。み。と。若。子。听。し。以。致。適。来。多。々。公。の。宣。ひ。  
 おん。身。小。迫。る。今。宵。の。大。厄。脱。る。路。の。き。休。み。切。て。おん。身。を。姑。摩。姫。が。代。り。て。赤。阪。へ  
 送。ら。る。千。の。一。個。も。多。々。公。の。命。を。救。ふ。べき。縁。も。や。ひ。ら。ん。思。ふ。ら。う。任。遣。おん。身。を。差  
 せ。とも。持。永。の。好。色。の。性。と。所。大。抵。棄。て。一。切。顧。み。さ。ら。う。或。は。忽。ち。離。男。と。せ。ん。致。開

を。識。り。去。け。こ。い。ふ。母。親。が。心。の。腸。を。断。ら。り。あ。り。念。慮。う。ま。い。多。々。公。の。命。を。換。難  
 父母の。與。の。節。義。を。破。り。仇。讐。小。從。人。も。あ。ら。ば。夜。發。遊。女。や。做。果。て。ま。孝。貞  
 と。全。く。せ。り。支。和。漢。小。例。さ。ぬ。あ。ら。ぬ。你。も。さ。ま。知。ら。ん。省。所。解。と。去。き。と。道。と。て  
 若。子。の。悲。し。も。亦。羞。愧。し。ま。も。十。寸。鏡。移。る。容。身。の。倦。さ。ら。厭。々。躬。を。漂。蕩。出。て。  
 浮。薄。さ。る。人。の。言。と。あ。り。こ。も。念。ひ。と。多。野。の。女。郎。花。花。咲。く。秋。小。遇。べ。や。後。の。茶。折  
 ん。衣。手。の。露。絶。れ。死。心。の。倦。れ。さ。ら。ぬ。母。曾。の。杜。け。敷。とも。さ。ら。び。き。俤。と。識。さ。ら。推  
 辞。さ。り。今。眼。前。小。父。の。命。を。多。霜。小。比。へ。氷。の。又。伏。人。と。謂。う。律。の。理。あ。く。も。母。親  
 教。諭。の。切。あ。き。ば。最。上。の。川。小。曳。こ。い。ふ。船。の。不。知。字。と。い。ふ。べ。も。涙。の。滝。は。向。き。あ。り  
 そ。も。念。ひ。る。因。果。と。只。俯。伏。と。居。ら。う。う。念。断。て。り。ひ。ろ。う。想。懸。る。ま。姑。摩。姫  
 と。の。猛。可。の。違。變。小。父。の。おん。分。説。立。ぎ。と。おん。肛。口。と。宣。ひ。す。も。母。の。あ  
 扯。も。赤。阪。と。奴。家。と。代。お。赤。阪。へ。差。り。あ。り。の。命。の。趣。念。う。背。き。信。ら。び。且。の。と

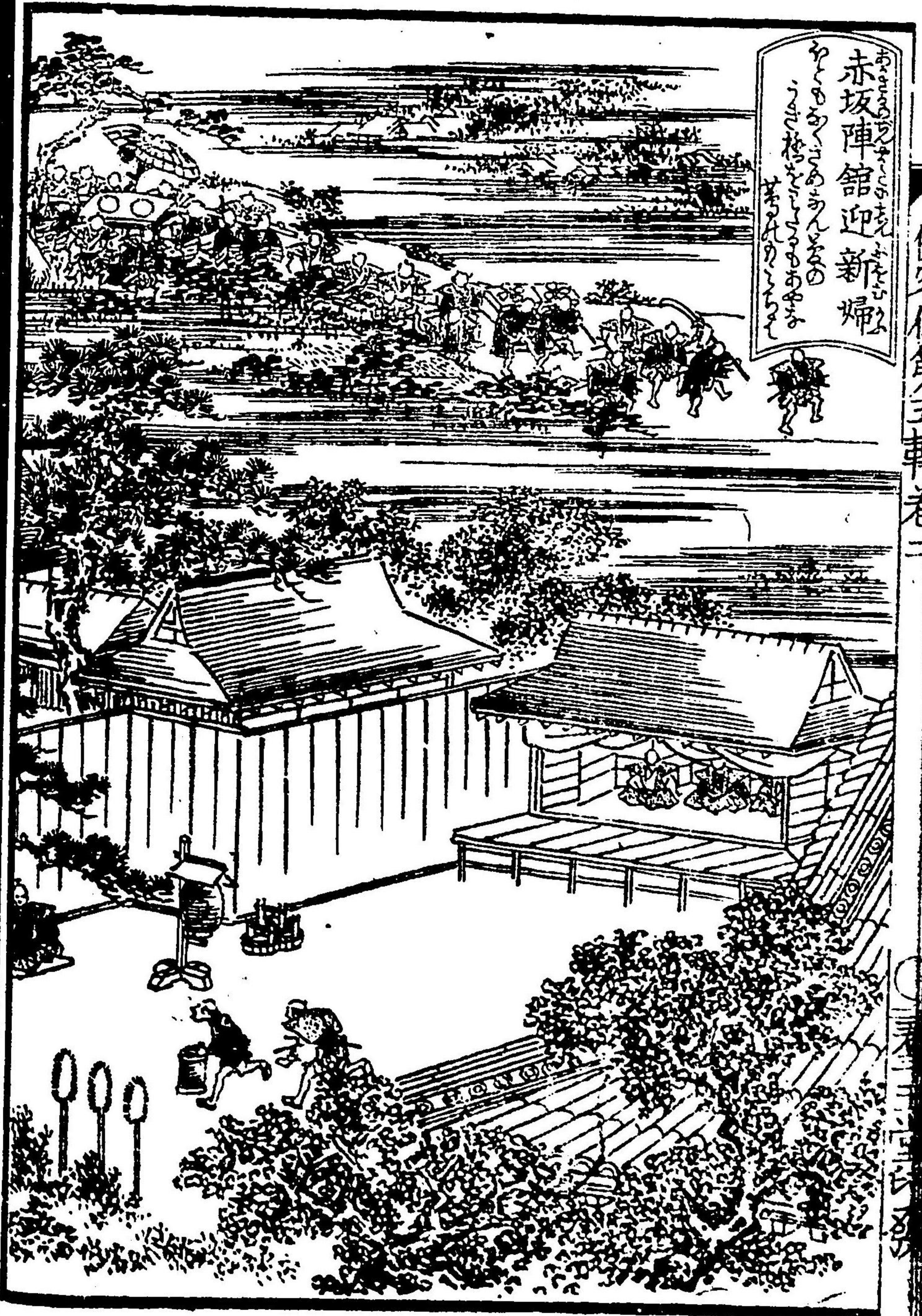




赤坂陣館

三

赤坂陣館



赤坂陣館迎新婦  
おきさかじんぐんむかひにまはる  
おきさかじんぐんむかひにまはる  
おきさかじんぐんむかひにまはる

赤坂陣館

赤坂陣館

まはる御教訓の切多言の愚痴も耳もあつて得付る。きりのうかぐ奴家顔  
の姑摩姫の小紛人など小生稟てもさうらう。浪風立と浄治まで。久後までも参入  
のおん興多ふの付りまふ。然れども身もいと泰もあつた。忽ち夫々厭もて復御効を  
繋ぎせん。開の苦もいふ。原も人並の恥も最熟知る。人見へん思ひ付ら  
ば。謙さうな法師も。おんと思立て。さう折る警切で。女も涙ぐ思ひ付ら。と  
有繫健氣の言稟す。木石の涌上る。泣水と抑へて背拵捺り。開の克所解るひ  
う。されども浄を急進して。女僧もあつた。一夏の係ても想ひのあつた。生醜き女  
とも俗の云相縁奇縁とやら。俺身も責めて克事する。終は丈夫の感謝して睦  
あつ事もあつ。這へて教へる。回る意得ま。道つ正直打向。即今听せ  
か如く苦も納得とひ。姑且御生害も。田のひ。姑摩姫の。ま。那里へ送  
て急難と通さる。ひ。正直の黙然する頭と。拾が彼を。左見右見。嘆息

。現你們の負操考烈きもの。き諺が。寔は正直智慮浅くと那里  
ここで。欺騙する。浄と念。險不慚愧の堪難。任せて。這休  
自滅を取ん。朽情も。云。俗の随ひ。姑。若子を送らん。任教在下。故  
以て。你們母子も苦む。最々本意も。不便も。復數回嘆息も。木  
石。慰めて。然。如何。這う。甚。浄も。奴家。任。那里  
去。將為。浄發覺の後。手段。這兒。最能。業。り。産  
易。鄙。諺。然。想。屈。の。若。子。の。乳。母。子。浦。風。の。幸。年。も  
長。心。伶。利。物。馴。他。萬。と。意。得。き。興。副。小。差。と。浄。て。定。措。は  
枕。進。退。と。分。付。る。期。小。臨。と。脱。落。の。あ。じ。若。子。の。夜。も。更。ん。這。方。へ  
来。て。化。粧。も。疾。々。収。拾。も。と。棟。立。て。奥。へ。入。る。ま。直。と。目。送。て。千。回。悔。め  
ど。又。更。の。謀。の。出。る。と。知。る。姑。且。の。言。任。せ。る。只。危。と。居。る。畢。竟。若。子

あつさう  
が赤阪へ嫁して。又また什麼ある話説あつさううあり。开そへ次回あつさうふ分解とを听きけり。

開卷驚奇俠客傳第五集卷之二終

122
25
15



